

色（衣）の文化史

歴史書は一般に政治 経済 民族 宗教 紛争などの変化や紛争を記述するが、この因果の絡みに色（衣）文化の影が意外に多く見えて興味を覚えた。

当稿は公私に徘徊した旅の随想であり、史書から拾った色の考察でもある。また色と人間の交流視点から世界史の諸問題を覗いたのである。

以下略記する。

【Ⅰ】 人類が求めた色（衣）

- 1) 環境や調和への憧憬色 例) 大地 空 植物等の色
例) 産業革命後の 制服色等
- 2) 自然崇拜色 このケースでは何故か一般的に大らか、濃鮮配色柄が多い。これは天体からの喜びや恐怖（夜間の恐怖感は各地に共通） 葬祭感 にも通じる。
例) アフリカ 北洋 内陸僻地等の嗜好柄 地方伝統染柄など。また静の動に対する憧憬にも同類の傾向が考えられる。
例) 教会のステンドグラスやイスラムの祈祷折伏布など。
- 3) 人間の色感応
例) 寒暖 強弱 調和 高貴 質素等などは衆知事項につき省略する。また衣触感応に「古今東西に人類が求めた衣風合や色は四大繊維から離れることが出来なかった。…」 （吉武教授 工織大）当時合織が始動する期にあつて含蓄の言である。
逆に人間が持つ相異感応は興味深い。
例) 国民嗜好色 日本は青と赤 上海は白と黒など
例) 太陽を日本の子は赤く描き 韓国の子は紫に描く。
- 4) 都市の主張色
農耕地拡大の必然として都市が構成され、その機能（治水安全 権力階級 器具 交易 葬祭 戦争等など）には特別な色が示された。

【Ⅱ】 主要色の変遷史

- 1) ベージュ系
流行の主流色である。大地や枯れ葉を示す色であり安定感を示す。
砂漠色に始まり紀元前には地中海文化の主色となり、イスラムの西進（8C以降）でイベリヤ半島に上陸、当時は森の大陸であった欧州の枯れ葉色や緑系色と合流して大成した。フランスは今も枯れ葉色発祥に固執するが、そのプライドが面白い。
- 2) 白系
綿、麻の普遍性と生成り色使用もあつて古今東西に最大の利用色で

ある。一神教では太陽を示し、ヒンズー ギリシャ ローマの大理石
崇拜や制覇統合の色にも通じる。

共通して清楚 純粹 高貴 神秘を示す色である。また恵水地(例 地中海北)
と貧水地(例 地中海南)の白度は異なるが、今もその嗜好が残されることに
興味を覚える。

近世王侯社会に高貴色として絹白 白陶 大理石が憧憬された。

3) 黒系

権力 強度 神秘 不幸 自然への恐怖を示す。

16~17C 錬金術士により各繊維共に濃鮮明色を得る。殊更に王侯文化は黒を
求めた。(例 漆黒 絹黒 貂毛皮) ロシア経済はこの毛皮が支えた。コザツ
クは東進し、その結果千島で江戸幕府と接触する。(司馬遼太郎説) ロシアの
嗜好色は今も黒と白。グレーは曖昧、調和に長ける色、

注) 世界の流行色を集大成するフランスの流行主色 11 系色の内、黒 白
グレーは流行色内の固定色指定であり、またこの 3 色との配色柄の評価は高く
今もシャンゼリゼの四季を飾っている。

4) 赤系

13C 以降ヨーロッパには羊毛製品が普及され、毛の主要色である赤色系域が伸
びた。殊更に、タチニズ(天然染料 17C)の開発により濃赤色が参入し、
ヨーロッパの主要流行色になった。

法王衣は紫から濃赤に変わり、ナポレオンも又この色の衣裳や帽子を愛して
ヨーロッパに君臨した。愛情、情熱、革命、太陽を示す。

日本の朱色は平城京を賑わしたが、丹鉛公害が平安京遷都因なる説も
聞く。江戸末期国旗制定以来 朱色から現行の赤に逐次移行した。

5) 黄系

仏教に云う陰陽五行の大地繁栄色、世界に共通して権威、知性、開明を示す。
殊更に中国、朝鮮では春到来を連翹の開花で喜ぶ。

この黄色の花に緑の葉を添える山吹は如何にも日本風色調である。

18C、アンチモン酸鉛の開発で黄顔料が世界に普及した。

6) 青系

世界に共通して信頼、調和を示す色。殊更に藍は綿の主力色となり、産業革命
以来ベージュと共に制服色となる。19C 末 Indigo 合成により藍の高い堅牢度は強
度の高い綿と共振して世界に急伸した。現在は人民服が最大用途と聞く。

注) フランス流行色は上記の他にローズ系 オレンジ系
グリーン系 パープル系 ブラウン系が挙げられる。

【Ⅲ】歴史に絡む色(衣)の文化史

人間社会史の創期に諸説を見るが、地球最後の氷河期を終え、気候地理が安定

化して農耕が始まった約1万年前説に同意したい。(cultureはラテン語で耕すの意)文化は人間の進歩する姿であり、文化には常に色が伴った。

四大文明地(エジプト メソポタミヤ インダス 黄河)の共通性は河川、綿花、文字と特異な色文化を持ったことであり、この文化特性が卓越性に通じたと考える。以下、世界の文化 歴史の推移に於ける色の存在を考察したい。

1) エジプト文化

オリエント、砂漠群が持つ単一黄土色に対しナイル沃土因もあって黒や褐色を、また藍、茜の遺布も現在確認される。この多色化保持(7~8色)が周辺国からの卓越因とも考えられる。

その1色青系顔料はインキ材となりパピエ(紙)文化にも貢献した。

2) メソポタミヤ、インダス文化

泥文化(干れんが、泥染衣)の文化は全砂漠地やオリエントのカSPA(村を囲む城塞壁)に普及し、泥染衣はと住人衣となった。

殊更に干し煉瓦は黄河流域にも及び、メソポタミヤ文化の大きな功績である。インダスではBC2300赤煉瓦が開発されたが、その燃料の乱伐採によりインダス河川は破壊され100年後には文化はガンジス河辺に移り大理石文化を構築する。この綿産地に赤煉瓦構築物が輝いていた。

3) ローマ/カルタゴの戦い(紀元前後期)

史述は北アフリカ穀倉地の争奪を指摘するが、背景には大理石文化/黄土文化 白綿布/黄白綿布の対抗があり、地中海交易を競ったローマ商人/フェニキヤ商人の利害争いとも聞く。

4) ゲルマン民族の大移動(4C~5C)

移動先に麻産地を開発し一部の民族は定着する。

5) 十字軍の戦い(11C-13C)の戦後変遷

史述はキリスト教/イスラム教の宗教争いを述べるが、昨今はこの争いで空前の巨利を得たメディチ家のその後の事業投資成果を指摘する史述が多く紹介されている。以下略記。

- 本拠をアムステルダムに置き、全欧、中央アジアに毛製品を普及させ爾来 欧州は殊更に羊毛繊維に親しむ大陸となる。またオランダの独立支援。明礬戦争(毛染め助剤明礬の交易権を巡りローマ法王とトルコが争い法王勝利。) 藍、タイセイ(青系染料)の入手交易争い(14~15C)にも関わる。
- オランダ交易(巨船化)による東南アジア交易は旧来のシルクロード交易を一変させた。当初は毛製品を輸出し明礬を輸入していたが、東南アジア産品の評価は高く、絹、香辛料に変わり、また日本の近代化創始にも繋がった。先ず古伊万里陶は景德鎮(中国)を排除して欧州随一の白度を得てマイセン陶(独)に定着し、更紗(ネシヤ)を欧州各地に小紋柄として定着させた。(16C)。この捺染意欲はやがて仏英の捺染機、シルケット機の創出に繋がり染色加工の新時代を生み、英国綿紡世界制覇の一翼を担うことになる。また新大陸(現アメリカ)への毛製品輸出は拡大し、代替輸入の綿花は英国

綿紡を急伸させた。また膨大な銀貨流入は東南アジアからの買い付け資金となった。(17-18C)

6) 英仏百年戦役 (14-15C 17-18C)

初回はフランドル地方の領有権を争い、ジャンヌダルクの出現で仏の勝利と記述されるが、本質は羊毛産地、染色助剤明礬を巡る争いであり、2度目はインド支配権を争い英国が勝利する。爾後 英国は本土で綿紡、毛紡の量産を指向し、仏は個性的な二次製品、流行色指向の産業形態に移行する。

7) イスラムの民族性

過信 純粹 貧困はまた功罪を呼ぶが、この民族は7~15C、間違いなくオリエント、地中海、欧州西部を支配した民族であり、その功績は大きい。シルクロード交易、モンゴル西進の協力者、地中海文化の大成、ヒンズー文化の東南アジア移転、近代科学の開発因誘導など。(天文、物理、化学、例えば alcohol, cotton, soda…はアラブ語。塩素水やその晒も8Cアラブの発明である。)

8) 錬金術士 (16~18C)

染色技法や新色の開発、新顔料の輩出に貢献した。
ギルド制との併立も効果的であった。

9) 産業革命

英国の産業革命(18C-m)は紡績 織布 染色加工の生産性急伸に大きく寄与した。二次の産業革命(19C-m)は合成化学 新染料合成も加わって以降の繊維産業は近代化された。

10) 英国の植民地政策 (19C)

旧来の先占主義を排し金融政策、産業殖産に徹した植民地策は成功した。具体策にはインドの独立化、中央アフリカの植民地化(綿&藍産地の確保)運河、航路、貿易港の確保は英国繊維産業を世界のトップに立たしめた。また 新大陸(アメリカ&豪州)確保や海軍力の保持に依って世界の最強国となる。

11) 第一次大戦 (20C)

独逸の賠償金対象に合成染料特許の解放が含まれ、爾来 米、英、仏、日、の染料合成は急伸する。

独の殖産体質は少々下降し始めたが、基礎、応用科学の進歩は上昇し続けた。日本の絹糸業と綿紡績は染色加工、二次製品などの付加価値開発や、独異な商社機能に依って二次大戦前には英国繊維産業と対等凌駕する迄に至った。

12) 第二次大戦 (20C)

絹業衰退し、化合繊の開発急伸する。S18 東京初空襲時の米パラシュートに日本は初めてナイロンの開発成功を知った。

戦後世界の繊維需要は回復し主要国の化合繊開発は急伸した。
先進国の流行色発祥はは欧州に一元化されてきた。

【IV】日本の色（衣）文化推移

- 古代色調 はアフリカ 中国に似て黄土白色系が目立つ。
- 奈良前期 古墳内装色に見る如く 赤、紺、が特徴として目立つ。
仏教色として（白/息災 黄/繁栄 赤/愛 黒/怨敵）が、
陰陽五行として（青/平和繁栄 赤/幸、富 黄/威 白/平和 悲哀
黒/破壊）が目立ち始める。
- 奈良後期 赤、紺が増加する。
- 平安期 寒暖対比色 ぼかし色。
- 鎌倉期 武士色調（重厚 桜花色柄）
- 室町期 寂調。 封建制差別化色。 応仁の乱に西陣職人は堺に避難し、
明に南宋織染技術を学び、乱後脚光を浴びる。
- 桃山期 絢爛調 南宋風の織り色柄
- 江戸期 元禄以降花見遊山の風流 町家妻女に茶系多い
着色率急増（洛中洛外屏風残存絵より）友禅発祥。
- 維新时期 歴史書は薩長倒幕の史に終始するが、この期に国内繊維産地が
全壊した事実が衆知されていないので改めて記述する。
日米修好条約の結果 質の高い絹糸輸出急伸のため国内絹価は
拾数倍に高騰し西陣はじめ全絹産地は崩壊する。
一方 輸入は安キャラコ布の乱入で遠州、河内など綿主要産地は
崩壊、 幕府諸策するも当時銀貨の金貨交換率は諸外国に比し
日本は低く、これが標的となり流出とまらず、政権崩壊の一面と
もなった。
この頃日本に初めて塗料が紹介された。
- 明治期 濁淡青系多い
- 20 世紀末 日清戦役の賠償金対応で（清国国家予算の約 3 倍） 国策は富国と
殖産を指標し大胆な諸策を施す。
繊維産業は最重要視され、文教策と豊富な金融策に支えられた。
諸外国に例を見ない短期間に国立諸高工 10 余校、商業高専数校
の創立、並びに各府県の職業校開校は日本の繊維産業大成に大き
な影響を与えたことを。外国誌に聞く。
この期に Indigo 合成の成功は綿産業拡大に繋がった。

注記 当稿は鼎会 講演（平成 28 年 10 月）の概要旨。

色染工芸学科
昭和 28 年卒 西川 三郎

